

「廃川地の利用」(長良川扇状地の場合)

日本の多くの河川は沖積平野を形成しています。上流から運ばれてきた土砂は、氾濫を繰り返し流路を変えながら流れる河川によって面的な堆積を続け沖積平野を形成しますが、扇状地もその一つです。今回取り上げた長良川扇状地は、岐阜市の中川原付近を扇頂とする半径約6kmの扇状地で、岐阜市の市街地の多くはこの扇状地の上に広がっています。

第1図は、1998(平成10)年発行の1:25,000地形図「岐阜北部」です。長良川右岸の長良橋下流付近から、岐阜メモリアルセンター(野球場や陸上競技場等を含む)や文化ホール(県民未来会館)、あるいは中学校や高等学校等の学校が線状に並んでいることが読み取れます。なぜこのような広い面積が必要な公的施設建設が可能であったのでしょうか。

第2図は、1891(明治24)年発行の1:20,000地形図「岐阜」です。長良川は、長良橋付近から3本に分かれていた様子を読み取る人可以します。これらは、北から古々川、古川、井川(現長良川)と呼ばれていました。第2図からは、長良川の流水は井川のみで、古々川、古川は河原になっていますが、ひとたび洪水が発生すれば、古々川、古川にも水が溢れて流れる状況(遊水地域)でした。

明治から大正時代にかけて、長良川には長良橋や

忠節橋等が架橋され、また長良軽便鉄道が1915(大正4)年に岐阜市内電車と接続されるなどして、岐阜市が長良川右岸へ発展することとなりました。そして、1921(大正10)年にはじまる内務省木曾川上流改修工事の一環として長良川改修事業が行われました。具体的には、古々川・古川を締切り、井川を残す工事で、1937(昭和12)年に着工され、1939年に竣工しました。この工事により、古々川・古川の流れていた地域は「廃川地(廃川敷地)」となり、約160haの土地が新たに生まれました。これほどまとまった未利用の土地が出現することは珍しいことです。第1図の長良川右岸、長良橋やや下流にある□の記号は締切りの記念碑を示しています。

先述した公的施設の建設は、この土地利用の一環として進められました。なお、他に農地や工場用地、住宅地等にも利用されました。

このように、新旧の地形図あるいは各種の地図(分布図等を含む)を比較することにより、1枚の地図では読み取れない情報を読みとることができます。世界分布図センターは、過去に発行された地形図は県内に限っては全て所蔵していますので、是非ご利用ください。

第
1
図

1998(平成10)年発行
1:25,000地形図「岐阜北部」75%に縮小

第
2
図

1891(明治24)年発行「岐阜」
1:20,000地形図 32%に縮小

参考文献

- ・伊藤安男編著 『地図で読む岐阜』 古今書院 1999
- ・高橋幸仁・松浦守仁 「糸貫川廃川地について」 岐阜地理学会「岐阜地理」vol.29 1988

「世界分布図センター」には、14万点を超える分布図・地図、地図関係図書があります。

また、「情報工房」ではコンピュータ及びGISソフトを使ってオリジナル地図や分布図を作成し、印刷することができます。

調査・研究や学習、国内外の旅行の準備等お気軽にご利用ください。

岐阜県図書館

世界分布図センター・情報工房

〒500-8368 岐阜市宇佐4-2-1

TEL (058) 275-5111 (内線286)

FAX (058) 275-5115

URL <http://www.library.pref.gifu.jp/map/>

E-mail mapstaff@library.pref.gifu.jp